

# 五十年を総括して

チャールズ・ハーツホーン

大塚 稔訳

## Philosophy after Fifty Years

Charles Hartshorne

哲学を考え続けて、もう50年以上にもなる。私は、1918年、陸軍の病棟勤務員として戦場にあったとき、現在まで抱いている哲学の基本的な考え方のすべてに思い至った。当時は、わずかの思想書しか読んでいなかったし、本格的な哲学の授業も一つしか受けてはいなかった。わずかに読んだ思想書とは、エマーソンの“Essays”（諸所に哲学的な論議がある）、コールリッジの“Aids to Reflection”、ロイスの“Problem of Christianity”、ジェイムズの“Varieties of religious Experience”、アウグスティヌスの“Confessions”であった。私は、特にこれらの著作を意識することなく、そのとき、以下の3つの考え方に思い至った。

(1) 経験は、本質的に情動的(emotional)かつ社会的である。感覚は、情動的な経験、つまり感じ(feelings)もっぱら派生的にしか自分の感じとは呼べないものだが、最後にどのように伝わるかを示している。肝心なことは、まず感じが存在して、その感じに私たちが感応するのであって、私たちが自分たちの感じによって応答するわけではない（この当時私はまだ、これをこのような言葉では表現していなかった）。その後、数年して、ホワイトヘッドの感じの感取(“feeling of feeling”)がうまくこれを表現していることに気付いた。あらゆる経験には、情的な統一体としての与件が存在するが、この統一体には二面性が存在する。つまり社会的ないし参入的であって、単に自己中心的であるわけではないという点である。言い換えれば、その二面性とは、公的であると同時に私的であるということである。1925年に、パースの研究を切っ掛けに、ほぼ同じような考え方に出会うことができた。パースは、感覚と感じを第一次性と同じだと考えて、第二次性と第三次性が一創造愛と連続主義の理論も同様に一二面性ないし多面性を留めつつ、社会的な統一体をないしていると主張した。

(2) 人間や動物の意志もすべて、統一体を留めた多様性であって、その多様性は本来、直接的に経験される。人間の種々の目標は、現実には、様々な方法や程度が重なり合った状態にある。この点では、ロイスの「共同体」の論議から、影響を受けたのではないかと思う。どのような行動も単に利己心から起こされているわけではないし、またまったく他と区別できる自己というようなものも存在するわけでもない。この点でも、一元論的および多元論的な極論は、共に誤っている。多様なものが一つの統一体の内に存在しているのであって、それを包括する一者を、私は神と呼ぶ。

(3) (1)の主張から、神の統一体の中身を、当時H.G. ウェルズが“Mr. Britling and The Bishop”で提案したように、生物に限定して、無生物を排除する必要はないということ。まったく

感覚しない単なる物質と、それと対置される精神ないし意志との二元論は、まさに何かを得ようとする経験の構造自体に、つまり自分以外の知覚や感じに参入しようとする経験の本来持っている構造自体に、矛盾している。以上のような立場に立って、私は哲学を始めたが、当初からかなり注視されることになった。二元論や唯物論は単に好奇の眼でしか見なかったし、ブラッドリーのような端的な精神一元論も同様であった。統一体における多様性は、まさに統一体における多様性として存在しなければならないように思えた。だからブラッドリーの挑戦は、どうも私には、単に技術的なものとしか映らなかった。ブラッドリーの諸関係批判は、論点先取ではなかったのか、あるいは論理上の誤りではなかったのか。しかしR. B. ペリーやラッセルの野放図な多元論は、ヒュームの場合同様、どこかにきつとうっかりしたミスが潜んでいるにちがいない。私にはその誤りがどこにあるかが分かるように思えた。しかしまだ多くの問題が残されていた。一つは、対象の種々の感じをまず最初に受け入れる主体は何なのか。それらの感じは、もっぱら二次的にのみ、あるいは対象に参入することによってのみ、はじめて自分の感じとなるのだろうか。1918年にはまだこの答えを見出せてはいなかった。トローランドの汎精神論の考え方や、後期のパースやホワイトヘッドの考え方、ライブニッツのモノドロジーが、答えへの手がかりを与えてくれた。つまりその主体とは、おおよそマイクロな存在<microentities>のことであって、とりわけ（現代の科学的見地から判断すれば）細胞や身体内に生息している個体<subhuman individuals:(event-cells)>を指すが、それらの細胞を構成している原子や分子、間接的には外界の物質を構成している動的な個体<active individuals>なども含まれる。この点では、バークリー的な主観主義（以前は喜んで弁護していたが）との隔たりが明白になった。私たちは、単なる観念を—もちろん神の観念ですらも—経験するのではなく、自分自身を観念している主体、あるいは少なくとも自分自身を感じている主体—神や人間以外の様々な主体—を経験するのである。私たちが感覚において感じ取っていることとは、自分以外の個体がどのように感じ取っているかという方法なのである。私がこれまでに読んだ哲学者の中では、ホワイトヘッドがもっともこの点を明白に述べていた。もっともパースも、「意識とは、脳細胞内にある公的な心の一種」だと書いてはいた（が、私なら、神経細胞全般、おそらく末梢の感覚器官、例えば錐体と悍体も含まれると言うだろう）。

もう一つの問題は、主体の時間関係に関する問題である。「私が何かに感応する<feel>」と言う場合の「私」とは、人間の生涯を通じて厳密に同一と見なせるようなものなのか、つまり乳児がわたしという以前に、あるいは「わたし」という言葉を理解する以前に、すでに存在しているようなものなのかどうか。それとも現実の個体<subject>というのは、感覚を持った感応体<the feeling something>—これは次の瞬間には、きわめて密接な関係にありつつも、新たな感じを持った新たな感応体にとって代わられる—を経験したり、感受したりするのかどうか。この点では、わたしは紛れもなくホワイトヘッドの弟子である（もっともジェイムズがすでにこの立場を取ってはいたが）。『自然の概念』—ノースロップがこの書物に非常に感銘したことを知って私も強い刺激を受けた（1922年頃のことである）し、後には、『形成さなかの宗教』やその他の形而上学的な諸作品、仏教徒たちはすでに2千年前からずっとこのように考えてきたことを知ったことなどが、この確信を強固なものにしてくれた。ヒューム、ジェイムズおよびホワイトヘッドまでは、自己の同一性の相対性に思い至らなかった西洋では、自己同一性を誤った一つの絶対的なものに仕立て上げてしまっていた。ストローソンとシューメイカーは、改めてこの自己同一性の概念を取り上げたが、不完全な

分析に終わっている。伝統となっている実体的な見方に代わる考え方に誤りがあることはうまく示せてはいるが、代替となりうるすべての考え方が誤まっていると指摘できたわけではない。

三つ目の問題は、宇宙的な統合体を、神の生命および経験として解釈するという問題である。先に触れた考え方によれば、神の一つの感応体も時々刻々に移り変わるものであって、また別の一つの神の感応体によって取って代わられる運命にある（この相対性の考え方が、相対性理論とどのように関係するかという難しい問題はここでは論議しない）。奇妙なことだが、わたしがホワイトヘッドについていくらか知る以前に、このような考え方の素地を与えてくれたのは、ホッキングであった。彼が、神の経験は、すべての時間を一度に全体として捉える全体一括<totum simul>という中世神学の考え方から、つまりは神にはまったく予測できない未来が残されていないという中世神学の考え方から、わたしを脱却させてくれた。この考え方をいつ受け入れたのか思い出せないが、それがホッキングとの論議の場であったことは間違いない。ホッキングはこの点では、ロイスに反対してジェームズの立場に近く、わたしの考え方に明確な確信をもたらしてくれた。わたしは早くから—フェヒナーやプフライデラー（後になって分かったことだが）たちが大分以前に同じようなことを言っていたのだが—単に不変だけの神というのは、内容空疎な抽象概念だと思っていた。この点では、わたしはヘーゲル支持者である。端的な無限や端的な絶対というものは、具体的な存在としてはありえない。神は、有限かつ無限、相対かつ絶対、可変かつ不変でなければならない。ヘーゲルには申し訳ないが、ここに矛盾概念を持ってくる必要はない。両概念は、局面の相違で処理できるからである。絶対を含む後者の側面は、抽象概念なのである。物が、ある抽象的な側面では不変で、具体的な充全さにおいては可変であることを禁ずる論理法則はない。

もう一つの根本的な問題は、宇宙的なプロセスの因果構造に関するものである。初期のプロセスの諸条件とその因果関係とが、宇宙のプロセスを厳密かつ完全に決定する（古典的な因果律）とするのか、それとも諸条件と因果律とは、プロセスを、絶対的にではなく、不完全かつ統計的に決定する（新古典的な因果律）とするのか。私は若い頃に、ウィリアム・ジェームズやホッキングによって、古典的な因果律は人間の行動には適用できないとする考え方に強く感化された。その後、パース、ホワイトヘッド、ハイゼンベルクその他の思想家たちによって、私は明確に、その古典的な因果律が単に普遍的に適用できないだけでなく、厳密にはどのようなものに適用できず、まったく妥当性に欠けるものだとして確信するようになった。古典的因果律は、人為的な単純化ないしは誇張にすぎず、本来、相対的な理論でしかないものを絶対化するという典型的な事例の一つに過ぎない。初期条件と因果律とが、起こりうる結果の範囲を常に限定することはできるが、絶対的な確実さでその結果を特定できるわけではない。それは、私たちが無知だからではない。無知だから統計的にしか法則を理論化できないということ自体が、そもそも無知の一つの表明なのである。誰も何も分からずに、自然の因果関係が古典的な因果関係だと言っているに過ぎない。スピノザ以来現在まで、それを証明しようと色々に試みられたが、すべて失敗に終わっている。パースは、量子力学が出現するもっと前に、古典的な因果律の世界は（マックスウェルは薄々分かっていたようだが）、厳密な意味では、認識不可能な世界だということに気付いていた。パースはこれ以上の観点を示して見せた。ベルクソンやホワイトヘッド以前に、パースは、充全な世界観は創造性を具体的な現実存在そのものに内在する普遍的原理と認めることによってのみ得られる（パースはこれを内発力<spontaneity>という言葉で表現していたが、ベルクソンやホワイトヘッドは、この内発力という

言葉を別の意味に使っていた)と考えていた。つまり因果関係は、事物の係わり方<way>だけを示しており、その係り方の中である任意の創造行為が誘発されたり、可能となったりするのであって、決して先行の行為によって完全に決定されるわけではない。

自由を制限するものは、先行の自由な行為だけであって、それ以外にはない。「制限」は決して完全に決定することではない。なぜ先行の諸事実<cases>によって現在の所与の事実が完全に決定されないのかというと、創造性や内発性の内実<meaning>や拡がり全体を、誰も十分に把握できないからである。創造するとは、不確定なものを残しながら確定すること、先行者としては個体を具体的に決定せずに、未決定を残しながら決定することである。実在は、こうして豊かさが増して行く。パースが見抜いていたように、個体の特質<particularity>は本来、法則によって決定されるようなものではない<arbitrary>。それは、何らかの必然性によってもたらされるものでもなければ、先行する個体の特質によって確定されるようなものでもない。それぞれの新たな個体は、法則によっては決定されない新たな個体であって、それらには、因果関係に縛られない自由がある。法則は普遍概念であり、たとえ個体と不可分に関連する場合でも、法則によって後続の個体が生み出せたり、完全に説明され尽くしたりすることはありえない。

1927年にハイゼンベルクの有名な論文が発表されると、ほぼ同時に、私はそれをある若い物理学者の友人から示された。私は、それをR. B. ペリーに見せたが、彼は気に入った様子ではなかった。すでに早くから、古典的な因果律とは縁を切っていた私は、その論文に新しい科学の夜明けを感じ取ることができた。以来43年間、多くの哲学者たちはその新たな理論をどうしても受け入れようとはしてこなかった。できれば適当な説明で誤魔化すか、その後の実験や理論によって反駁されはしないかと願いつつ、哲学上の問題にはまったく何の影響も与えないと論じてきた。ある意味ではそうだったと言ってもよいが、一体その哲学上の問題とはどのような問題だったのだろうか。パースやベクルクソン、ホワイトヘッドやデューイにとって、その哲学的な問題とは、因果の概念の論理とは何かという問題であった。これには二つの見方があるが、いずれの見方も、因果関係を実現する<real>可能性と見ている。つまり最初の条件や法則は、生じる可能性のあるものを特定の状況に限定するにすぎない。まともな哲学なら、これを大いに歓迎するのだろうが、まだ決着を付けるべき事柄として、生じる可能性のあるものが現実に生じている事柄のすべてであるかどうか、あるいは先行の因果関係や「実現する」可能性は、実際に後に生じる出来事をそれほど限定することはないかどうか、という点が残されている。この最初の見方には矛盾がある。生じる可能性のあるものが、現に生じているものと同じ性質のものだとすれば、可能性と現実性を区別する意味がまったくなくなるように思えるからである。現に生じるものと生じる可能性のものがまったく異なるのだとすれば、実現する可能性ないし因果的な可能性は、因果的な必然性と何ら変わらなくなる。とすれば、現実性とか可能性というような様相上の区別は崩れることになる。これだけでも、この考え方に疑念を抱かずにはおれないが、その他にもまだ多くの見解の相違があって、このような疑念を持つのである。私は、無制限な決定論は何かの間違いだという考え方にまったく同感している。

哲学上の問題は、本質的には、量子力学の登場によって変化させられたわけではない。ただ量子論の哲学的な立場が、まったく古典的な考え方と異なっていただけである。もちろん何がしかの変化はあったし、その変化が相当重要なものであったことも事実である。その変化とは、哲学と科学

との間に見られる思想風土の変化である。ヒュームやカントの時代には、科学者も哲学者も、同じように古典的な概念で考えており、誰も、蓋然的な科学の出現を想像だにできなかった。科学を真面目に考え方に取り込むことは、古典的な決定論を信じて受け入れることに他ならなかった。確かにデカルトは、人間の意志に関しては非決定論者の立場を採っていたし、ロックやクルージウスも、そうであった。しかし彼らの科学に対する見方が、先の意志の問題に不可欠な関わりを持つことはなかった。だから、結局、哲学者たちは次のような二者択一に直面することになってしまった。つまり因果関係に関しては、無思慮な二元論を採るか、決定論をすべてに適用するかの二者択一である。しかしこのような状況はもはや完全になくなっている。というのも、現在の科学は、古典的な考え方を採ることはないからである。今後、決定論者にだけ、科学の威光に頼ることなく、その哲学的立場を説明する責任が出てくるだろう。しかも決定論に基づく論議は、ストア派やスピノザからカント、ショペンハウアー、ド・ブロイその他の思想家に至るまで、種々の話題の中で隈なく研究されてきた。私は、この決定論に基づく一切の論議は失敗であったと思っている。これは、限られた決定論であっても同じことである。結局は、すべての生き物は、初期条件の決定に従って未来の可能性が制限されると見なして生きねばなくなる。しかしどのような生き物も、未来が完全に決定されるよう行動することなどできはしない。生きるとは、そのような絶対性がまったくないこと、それは、絶対的な秩序であれ、絶対的な無秩序であれ、そうなのである。現在の科学にあると思える曖昧さは、一つ。量子論的な不確定さが、動物のようなマクロな生き物の場合には考慮する必要がなくなる点であろう。マクロな生き物の場合には、統計的な蓋然性が極めて高く、見かけ上は確実だと言えるほどに達しているからである。ハイゼンベルクの計算では、もっとも信頼できる判定者によれば、初期条件が決まれば、人間には事実上まったく行動の自由がなくなると言われる。しかしここにも哲学的に考慮すべき問題が含まれている。理論はどのようなものもそれに適した体系を説明するために作り上げられたものであって、そのような体系の中では、いかなる経験や思想も体系全体に当てはまることはありえないという物理学者もいる。したがって、その特定の理論を、補足説明せずに無制限に<supplementation> (ハイゼンベルクがこの文脈で使っている言葉)、感情や思考、意図を持った体系である人間に適用することはできない。ウィグナーが言っているように、意識の出現<presence>は、画期的なことだが、量子力学でその重要性が云々できることはないし、量子論が提示する法則で自然の全体が説明されるわけでもない。いかなる哲学者も、量子力学の絶対性を強要する必要はないし、カントもニュートン力学の絶対性を強要したわけではなかった(カント自身はそうしたと思っていたようだが)。しかしどうしても譲れない点は、古典物理学を復権させて、量子力学に置き換えようとする点であろう。ある化学者の友人が以前私に、「何をしてもいいが、もうあの野放図な場所へは戻るべきではない」と言ったことがある。

存在となる<becoming>とは、何かを創造すること。つまりすでにその個性が創造されたものの単なる表れが、存在となることではない。これは、神学的には、途方もなく重要な事柄に適用できる。例えば、それは、悪の論証の古典的な形式を排除することになる。古典的な論議に基づけば、神の創造行為は、ただ一度きりに有効な創造行為であって、神は一度きりですべての個物を創造できると考えられた。しかし創造性を原理とする考え方を標榜する者は、一度きりの創造をそれほど重要なことだとは考えない。神にも、個物のすべてを決定することなどできないし、そもそも個物には、ある程度自己決定的な側面がなければならないからである。とすれば、どうして悪は存在するのだ

ろうか。この問いは、更にきわめて重要問い「善は存在するのか」という問題とセットにして考える必要がある。というのも、それぞれの個的存在が自己決定的であるとすれば、それらの個的存在物同士の間には、どうすれば調和が保てるのかという問題が生じるからである。これこそが、卓越した創造性<eminent Creativity>のなせる業なのだというのが、最善の答えだろうと思っている。これは、被造物の創造性に遍く影響を与えはするが、そのすべてを決定することは、決してない。このように限界があるからこそ不一致が生じるのだし、被造物間での不満も起こるのである。しかしその限界内のことに関しては、もっぱら偶然だけが存在し、善悪を操る神の摂理は存在しない。このような至高な創造性が存在すること、まさにそのことが、善のあるべき姿を示すことになる。つまり卓越さの程度が低く、より自由度の大きい純粋な創造性を持ったものが存在する限り、悪は存在せざるを得ないということなのである。

狭い川に物が浮いているとしよう。川幅が狭いので、その物がどこまで流されようと、それが浮き続けている限り、どこに辿りつくかはかなり正確に言い当てることができる。しかし川幅が広くなると、兩岸の土手が広くなる分、その物がどこに辿りつくかを言い当てることは困難になる。川幅を限りなく狭くして不確定性を一切排除しようとする、そもそも肝心の、川に浮かぶ物自体が存在しなくなる。これが世界を創造するものに定められたディレンマである。意味のある出来事を存在させるためには、それ相応の範囲内で被造物の自己決定権を認める必要がある。しかし不運にそれなりの位置を与えようとする彼の見方は、同時に、幸運な調和をも乱すことになる。リスクを小さくすれば、好機も少なくなる。このディレンマは、相当深刻だと思っている。無害であるにもかかわらず、豊かで生き生きと物事が生じる世界、つまり理想のユートピアというものは、両立し得ない矛盾概念であるか、それとも単なる戯言かのいずれかでしかない。

残念なことに、この有神論の立場では、悪の問題が、唯一の、あるいは私にとってはもっとも不可解な、難題というわけではない。私は有神論者であり続けようとおもっているが、だからと言ってこのすべての問題にはっきりした解決策を持っているわけではない。

ここで私の立場について、少し触れておきたい。これは、ほぼ50年間にわたって、一貫して採ってきた立場でもある。この私の立場は、過去50年間の思想界の変化によって、意味を失ってははいないだろうか。まだ現在でも有効な思想だと言えるだろうか。この私の哲学は、未来を益する思想となりうるだろうか。

思想界の変化は極めて大きい。プロテスタントやユダヤ教の至上主義は、大した影響力を持たなくなっているようだし、ローマカトリックの至上主義も同じように力を失っているように見える。人々は、偏った信条に偏しない宗教、宗教的ではないけれども、世界観として過不足のない見方を捜し求めている。現在では、マルクスの考え方が良かれ悪しかれ世間の注目を浴びている。アメリカ哲学とも言うべき新実在論は忘れ去られているし、批判的実在論も同様にほとんど姿を消している。もっともウィルフレッド・セラーズの巧妙で煩雑な思想は、この延長線上に捉えることもできるが、プラグマティズムは、明らかに大きな影響力を持ってはいるが、おおよそ他のもろもろの思想と混在しているのが現状である。ロイス、ブラッドリー、ヘーゲルのような観念論は、わずかに信奉者が点在している程度だが、いわゆる「言語論的展開」は目立った潮流になっている。また記号論理学の影響も無視できない状況にある。専門化が極端に進んでいる。現代の哲学者は、もっぱら、感性学者<aesthetician>であったり、倫理言語の分析学者であったり、論理学者であったり、

社会政治学的な哲学者であったり、科学哲学者であったり、歴史哲学者であったり、あるいはまた宗教哲学者であったりといたるところだが、私の専門は、と聞かれば、否定的な方法で答えるのがもっとも簡単な方法だろう。私は、論理学者ではないが、現代の論理学をある程度利用はしている。私はメタ倫理学者ではないが、私の哲学を理解するには、幾つかの基本的な倫理学の原理が重要な役割を担っている。私は、科学哲学者ではないので、数学、物理学、発生学、進化論の専門的な技術を習得しているというわけではないが、自然科学や心理学上の哲学的な意味合いについては、相当程度の知識は持っていると思っている。感性学や形而上学、形而上学については広範囲な歴史的諸問題を含んでいるが、および行動生物学（動物の行動を研究する学問）の一分野が私の専門だが、とくに芸術学についてはほとんど書物を公にしていない。

原理主義的な宗教が色々な意味で衰退する中で、私が宝のように大切にしてきた原理主義的な宗教を批判する哲学の価値が、逆に色々な意味で受け入れられるようになってきている。例えば、「人格の不滅性」（この言葉にはまったく異なった二つの解釈が可能のために、あえて引用符を付している）である。新古典的形而上学は一私の立場をそのように呼んでいるのだが、ごく一般的な人格の不滅性を認めない。最近までこの主張は、宗教感情と深刻な衝突を起こしていたが、現在の深刻さはどの程度なのだろうか。ティリッヒもニーバーも、明らかに伝統的な不滅性の考え方にはまったく関心はなさそうである。教会の信者たちのほとんどは、果たして、自分たち（や他の人々が）天国に行くことを願って生きていたり、また地獄を敬遠して生きていたりしているだろうか。

ホワイトヘッドの読者なら誰もが承知しているように、不滅性にはまた別の見方がある。これによって、少なくともある程度は、伝統的な見方に分相応の仕事させることができるのではないかと思われる。確かに現在ではもはや、将来悪い人間にさせないために、永遠に続く地獄の恐怖を脅しに使う、その行動を抑制させるような時代ではない。しかしこの脅しは実際にはどの程度有効だったのだろうか。それは、善良な人間にぞっとするほど悲惨な影響を与える方法ではないのだろうか。

友人との別れに会って、またあの世で再会しようというような、情に流された場面に、私も出くわすことはあるが、むしろ友人が生を終えようとしているこの世でこそ、友人のために今何ができるかを考えること、そのことの方が、より健全な考え方ではないのだろうか。フロストは、「まさにこの世にこそ、愛は存在すべきであって、それ以外に愛に相応しい場所があるとは、私には思えない」と述べている。この問題に関しては私も、おおよそ同じ立場である。このような考え方に基づきながら、人類愛に満ちた文化を築くことはできるだろうか。もしできないとすれば、そもそも我々にそのような文化を持つことが可能なのだろうか。多くの人々は、この世は不公平だから、この世とは別の世界に行ってもっと公平な世界を手に入れたいと望むことは当然のことだと反論する。しかし創造性を原理とする考え方では、どこに行っても、たとえあの世にでも、好機があり、善があり、悪があると言う。更に言えば、自己同一性も、後で述べるように、それほど重要なこととは考えていないので、根本となる動機づけも、当人の同一性に基づいた長期に及ぶ利点に求めることはできない。正当性の要求というようなことも、つまり各自の望みに応じてそれぞれがその正当性を要求できるというようなことも、最終的な原理として、遍くすべてにわたって妥当する、あるいは形而上学的に妥当する、ことだとも考えていない。

多くの人々が不必要に贅沢な暮らしをしながら、一方で他の多くの人々が貧困に喘いでいるというのは、確かに悲劇である。しかしこれを解消するためには、天国ではなく、よりよい社会組織を

形成し、その方向に進むように仕向けることであろう。「自発的な厳格さ」〈Voluntary austerity〉というのは、古くから言い習わされてきた徳目だが、それを新たな倫理として採用する必要がある。この点では、デニス・グレットと同じ意見である。全世界を潤す豊饒な経済を夢想するのは、愚かであり、倫理的にもおおよそ誤った行為だと言っていいだろう。このような野放図な夢想は、素面で考えれば、政治的にはまったく溜息の出るような絵空事でしかない。すべての人々が、贅沢を望むということは、実際には、何百万、何千万もの人々の悲劇を望むに等しい。素晴らしい豊かさを入れる巨大なポケットと恐ろしく悲惨な貧困を入れる巨大なポケットが存在する。アメリカには、明らかに前者があるが、アジアや南アメリカには、後者がある。しかしこの両者は、ほとんどどこにでもある事柄である。昔からある貧富という対比自体は、すべての者が豊かになっても消えそうにない。消えることが切なる願いではあるが、それが無理なら、せめて近い将来に望むべき最善のことは、富める者は貧しい者へ、貧しい者は富める者へと歩み寄れるように成長を下降ないし上昇させること（特に貧者が後者に近づくような成長を実現すること）。そうすれば、富者ももっと富を自発的に放棄することになるだろう。地球の資源は限られているし、人口の膨張は、近い将来、止まるだろうという兆候もないので、今後の世界経済が繁栄の経済を謳歌できないことを如実に物語っている。人類は、今後も自らの資源とは裏腹な方向のボタンを押し続けることが十分に予想されるし、そうなれば資源の分配をどうするかという問題も、避けては通れなくなるだろう。我々が公正さを実現しなければならぬところは、この地球上であって、天国などではない。聖書に見られる富める者への疑惑は、それなりに大切なことだが、それ以上に大切なことがある。この点では、聖職者をもっと悔んでもいいはずだ。（まして裕福な教区民はなおさらのことだろう）。聖職者たちは、その事実を覚悟の上で説教に取り入れてきただろうか。ヒッピーたちは、この点について少しでも考えたことがあるだろうか。

自己決定と、同じことだが好機も、共に遍く行き渡っていることなので、公正さはどこであろうと、おおよそでしか実現されず、厳密さは望むべくもない。とは言え、黒人に対する歴史上の不正さについては、弁解の余地はない。要するに、この世界が、我々各人に、あれやこれやの恩恵を受けているということではなく、我々に求められる合理的目標が結果として普遍的な善となるようなものであること、しかもその善は、肌の色のような意味のない基準によって、個人が極めて不当な不利益を被るような善であってはならない。奴隷制度と長期間にわたるその制度に伴う残滓や諸結果が、現在の不安定と幻滅との基本的な源泉となっている。我々は風に誓いを立てているので、嵐に驚かされる必要はないだろう。しかし歴史の悲惨な事実として、そのような嵐が（訳注：ヨブ記のように）、しばしば、不公平に扱われてきたという不平不満を心に抱く人々に害を及ぼしてきたのも事実である。

先に私は、伝統に反した人格の不滅性について触れた。これは、ベルクソンのホワイトヘッド的な理論であって、存在となったものは集積する性質を持つという理論であった。言い換えれば、これは、「過去の不滅性」と言われる理論である。不滅になるのは、我々のこの地球上での生、つまり現実に行動した振舞いの数々なのである。この世での振舞いの数々は、全将来にわたって、背後に隠れた中身、記憶、知覚〈perceptions〉として存在し続ける。確かに、これらの記憶や知覚は、たいていの場合、通常は非常に消えやすいものではある。しかし我々の有神論の哲学では、これらが際立って優れたものとなった神の知覚や記憶が存在する。その神の並外れた知覚と記憶によって、



我々の振舞いが隔々に至るまで生き生きと「永遠に生き続ける」ことができる。これは、人格の不滅性なのか。具体的な現実の諸々の経験がその人に固有のものでないとすれば、一体それを、何と云えばよいのか私には分からない。それらの経験がすべてを表してはいるが、実際には一人の人格としてしか存在しない。この現実の種々経験を離れれば、我々の人格は単に経験の可能性でしかない。天国で「目覚める」ことを望む人々は、この地球上での活動がありのまま残されることを求めようとはしない。むしろそのような人間は、あの世で余分に追加される可能性の実現を求めようとする。私も、ホワイトヘッドと同じように、現実の出来事や経験こそが具体的な存在<entities>であって、現実の価値はすべて、それらの存在の中にあると主張する。不滅性がすでに創造されたものをありのままに残すことだとすれば、ホワイトヘッドの見方は、それを支える見方となるだろう。しかし今問題にしていることは、そのまま残されるのか、それとも余分に追加される創造行為があるのかどうか、という点である。ホワイトヘッド以前の名のある哲学者で、この区別を明瞭に意識した哲学者はいただろうか。おそらくフェヒナー一人ではなかった。宗教の未来は、少なくとも、人々が次の事柄に気付くかどうかには左右されると思われる。つまり我々が自ら創造することがそのまま残されると考え、後は命に恒久的な意味が与えられれば十分だと考えるか、果てしなく続く自己創造行為は、人間が神になる—神だけが果てしなく自己創造行為を繰り返せるから—ことと大して変わらなくなることに気付くかである。死は、不本意なこと<wrong>であって、そもそも悪である、あるいは道徳的に誤った悪そのものだ、という感情には、幾つかの混同が見られる。(1) 具体的なものと抽象的なものと混同。生物が残されるというのは、具体的で現実的な生物がそのまま存在し続けるという意味ではない。今現時点での生物の本質は、どうせ次の瞬間には存在しなくなる。むしろ今現時点での生物の潜在的な本質、それが次の瞬間には現実のものとなるという方がいいだろう。そして今現時点で生物が現実を持っているものは、過去の事実<reality>となるだろうし、思い出される場合や知覚される場合にだけ、その過去の事実は新たな現在の事実となる。生物が生き続けることにおいて残されるものとは、抽象的なもの、つまりその生物の自己同一的な形質や形態である。しかしその生物の現時点での種々の経験は、過去に帰属することになる。現実的なものの根本が残されるというのは、このような抽象的な持続によってなされるわけではない。生物は、本能的に自らの命をどこまでも持続し続けようとするが、この自己は、抽象概念であって、更に抽象的な種の持続という概念に結び付けられる。そしてひいては、生命一般の持続というもっと抽象的な持続へと繋がって行く。生物は、しばしば本能的に、命をかけて自分の子供たちを守ろうとする。自己を残すという自己保存は、自然界では絶対な真理ではない。

(2) 特定の意識が新たな経験の中で持続して保てないことと、意識自体が持続して保てないこととの混同がある。意識自体が持続して保てないというのは、確かに途方もないことだろう。もっとはっきり言えば、それは到底考えられないことだと言ってもよい。それは、自分自身の意識を持続して保てないということが、当人にとって考えられないことと同じである。

(3) 有神論者には、被造物の経験と神の経験との混同が見られる。私の人生を全く馬鹿げたものにするのは、私の死ではなく、神の死である。(しかし神の死という考え自体が全く馬鹿げている。) すべての生物は、意識するにせよしないにせよ、神の命への贈り物なのである。死や、死以上の事柄からも、つまり我々の経験の一切が、(人間から見て言えば) おおよそ忘れ去られた過去へと消えてゆくという事実からも、我々が蒔いている種を最終的に収穫するものが、我々自身でな

いことは確かなことだと言わねばならない。

私は、五十二年間、次のような信念を抱いてきたが、この信念に変更を迫られたことは一度もない。その信念とは、自己に対する関心、つまり自分自身の将来の多感な出来事や運不運、および死に対する関心は、決して、行動を合理的に動機付ける唯一のものではないという信念である。全く同じように、自分以外の人々の将来に対する関心も、合理的な動機付けの一つとなる。自分自身の将来にだけ関心や興味を抱くことは、余りにも不合理である。現実的に今存在する自己は、興味を抱きながら、今後の成り行きを思案しているが、その思案には、自分自身の将来だけでなく、他の人々の将来も含まれている。今後の成り行きを今現在楽しみにしているということは、それを楽しんでいる個体がいつも今現在の自己が行っていることから益を受けるという保証をまったく必要としない。自分の将来の自己に興味こそそれられるように、他の人々の自己にも同じように興味こそそれられる。興味を引く事柄に何の興味も持てないというのは、全くの無知か、理性が欠如しているかのどちらかである。変化にあっても一貫して持ち続けられる単一の知覚する〈empirical〉個体という自己同一性というものは、この動機付けを解く鍵にはならない。すべての仏教徒は、この事実にも二千年も前から気付いていた。ホワイトヘッドも、それに気付いた。西洋の思想家で、どれほどの人物がこれに気付いたのだろうか。ホワイトヘッドも言っていたように、仏教徒にもキリスト教徒にも見られる一つの弱点は、それぞれが自分たちの主張を守ろうとしたことにある。何百万人ものキリスト教徒たちが、「汝の隣人を汝のごとく愛せよ」という言葉を口にしてきたが、同時にまたしかし、間違いなく次のような形而上学も多かれ少なかれ受け入れてもきた。つまり「私は自分を愛する。なぜなら、私は、自分に他ならないから。私が他の人になることはないのだから、私は他人を私自身のように愛することはできない」。これこそが、ほとんどすべての西洋の宗教思想に見られる唾棄すべき醜聞なのである。

死が不本意なことであるという感情には、また別の混同がある。余りに早く来る死、まだ必要な可能性のすべてを実現していない間にやって来る死というものは、もちろん一つの悪である。私は、このような死を神の摂理とは考えず、不幸な悲劇だと考える。人生には、軸となる時期がある。幼児期、少年期、青年期、成熟期、老年期がそれである。それぞれの時期には、その時期固有の目新しさがあって、以前の経験とは全く異なった鮮明な目新しさを与えてくれる。それぞれの時期は、運がよければ、それなりに長い年月を享受できるし、その時期に固有の課題の変奏も、退屈しない程度に変化に富んでいるし、十分に課題の価値を実現できる豊富さを備えてもいる。感覚的なアナロジーで表現することを許してもらえらるなら、実現されるべき課題は、変化が有限であってこそ価値があるのであって、けっして無限な変化に価値があるわけではない。個性も、一つの課題である。それは繊細で複雑ではあるが、間違いなく一つの課題である。個性は多様な変化に耐えることができる。しかし伝統的な不死性の考え方には、時空間に制限のない変化が含意されている。私の個性が、時空間に制限のない多様な現れ方に耐えうるということに、私は強い不信感を抱いている。そのような無限な変化を楽しめるのは、私自身ではなく、神をおいて他にはないからである。神はおそらく、私を、神の記憶のうちに、神が感知する〈experience〉私以外の無数の対象と共に、取り収めてくれるだろうと、確信している。しかしこれは要するに、時空間に制限のない変化に見合うだけの課題は、神しかないということでもある。私は現代というこの時代のこの場所に、私の痕跡を残すが、私自身が無限に存続することを主張することはない。

ということは、単純に死そのものに限れば、いかなる悪もないということになる。死は、単に一つの境界線、神以外のもののそれぞれの課題を明確化し、区別する境界線なのである。何世紀にもわたって、先に述べたような哲学的観点に誰もほとんど触れてこなかったのは、不思議なくらいである。人々が混乱していたのも当然のことだろう。一般の人々は、死を正当に捉える理論すら持つてはいない。動物には、そのような理論は不要だろう。死ぬ運命にあることが分かっているから。しかし人間には、必要だ。死ぬことが分かっているから。

天国の夢や地獄の悪夢を放棄することによって、人間は、助け合っで気高く生きるというこの世の現実の問題に関心を集中しやすくなるだろう。

現代の若者は、考え方に意味があるかどうかを厳しく求めようとする傾向がある。私は、一つの方向として、創造性を原理とする考え方には意味があると考えている。決定論的に物事を捉える見方に立てば、神学であれ、神学以外の学問であれ、人生は、悲劇や害もなく、美しく衝突もなく、活気に満ちているという考え方に安易に導かれてしまう。おそらく「第一原因」となるものであればなら、このような理想的な事物の体系が構築できるかもしれないし、あるいは人間の創意工夫や決断力でも、そのようなことがあるいは可能かもしれない。最初の諸条件がいったん完全に整うと、すべてのことが、それぞれの思う通りに実行されるというような世界。しかし創造性の哲学は、このような夢物語を一掃する。夢想家はすべて、無意識のうちに、創造性が欠落した世界を思い描いているのである。自己で決定できる能力を持った諸存在は、それぞれの目的を、ただ運がいいということだけで成就しているに過ぎない。私がXを決定し、あなたがYを決定すると、結果としてXとYが残ることになるが、このXYという決定項は、私もあなたもどちらも決定しなかった事柄である。かりに神、つまり卓越した決定者を考えに取り込んで、あなたや私には、ある程度の自己決定力は残っていなければならない。ということは、依然としてXYという決定項はそのまま残されるのであって、たとえ神にでも、そのXYは、決定したり意図したりすることはできないということである。またそのXYは、因果的に事前に決定されることもなかった。それは、ただ生じたというだけである。偶然性は、自由と何の関係もないと嘲笑する常套手段では、この点が手品でもかけられたかのように取り逃がされてしまう。自己決定を伴う目的が偶然に交差する<chance intersections>というのは、多様な活動的な個体が紛れもなく存在するという考え方からおのずと生じる。ただしこれには、「偶然性」が、誰によっても意図されず、単に因果的にのみ起こる可能性のある出来事でもなく、初期条件が与えられていなければならない。偶然事はどのような事物にも生じるし、なかには不快な事柄も当然生じる。

理想世界はありえないからと言って、すべての改良が愚かだということにはならない。改良の本当の目的は、我々をより以上に天国に近づけることではなく、与えられた条件下で、危難と好機との配分をもっとも効率的に最適化することなのである。科学や科学技術には変化が避けられないが、それらが変化すれば、当然、生活習慣や組織も以前と同じようには立ち行かなくなる。つまり改良しなければ、天国に近づけるどころか、地獄へと近づくことになる。環境汚染は、明らかに、生の質を悪化させているが、幸いにして我々には、この悪化の速度を遅くする機会が与えられている。天国は、この道の終着点などではない。

近世初期の科学の見方は、人間の善に対する力が高まったとする見方だが、それは、同時に、悪に対する力も同じように高まっている事実を余りにも軽んじてきた。自由はすべて、危険に満ちた

ものである。科学は、人間の自由がもたらす結果を増幅し、ある点では自由そのものをも増幅している。いずれの点でも、自由は、人間という在り方においては、すでに無視し切れないほどの危難を増幅している。当初から、新たな危難が新たな好機を凌ぐことのないように、最大限に注意を払うべきであったろう。生には全く何の悲劇も存在しないとする見方は、余りにも不適切である。このような見方の一部は、決定論の哲学に責任がある。まず神学上の決定論があって、その後一般の学問上の決定論が出てきたが、いずれも粗末なものであって、その付けは、現在も尾を引いている。貧者が貧しいのは、彼らには貧乏こそが相応しいからだ、親切に物申す人々がいた。結局、神はすべてを統制しており、公正だからだというのがその理由である。神学以外の分野にも、同じような決定論の残酷さはある。しかもすべての夢想家たちは、そのような決定論に耽っている。彼らによれば、物事には正しい在り方が存在するか、存在しうると考えられている。仮にそのような正しさが存在すれば、不適切なことがあっても、ほとんど同情に値しなくなる。またもしそのような正しさが存在しないのだとすれば、当然、存在すべきだろうし、それを邪魔するものはすべて排除されねばならないだろう。しかし社会組織は、すべての危難を取り除くようにはなっていない。せいぜい、自由によって起こりうる不幸は軽減し、幸運は支援しようとする程度である。社会組織では、幸運や善悪を排除することはできない。そもそもそのようなことはありえない。不運な事柄は人間には付きものだからである。連邦政府の委員会報告では、現在の経済組織では、事実上、相当数の失業者が生み出されているだけでなく、被雇用者の大半が哀れなほどに低収入でもある。我々は一方で、不必要な浪費に明け暮れているが、それが我々にできる最善の方策だとは言えないだろう。暴動を起こして、財のある有力者に、何が必要かを知らしめることも、余り得策なこととは言えない。

今日顕著に見られる無政府的傾向を思うと、本当の意味での創造性を原理とする考え方の持ち主であったオルテガの言葉を思い出さずにはおれない。「無政府主義は、社会の病である」と。理に適った社会行動というのは、素晴らしい創造行為の一つである。人間は、少なくとも、為す善に応じて、悪をも同じだけ為すというのは、驚くべきことである。協調して都市を維持しようとする問題は、家族を維持するのも同じことだが、心構えの良い人々とか、あるいは心構えも知性も素晴らしい人々とかが、どの程度、邪な人間や愚かな人間を圧倒できるかというだけで済む問題ではない。善良で知性もある人々は、様々な方法で自らの創造性を発揮しようとするだろうが、完全に調和が保てるのは、ごくごく稀なケースのみである。

「中産階級」の考え方や理想が間違っているのは、主に、その悲劇的でない、決定論的信念であって、それらは、現実のものであろうと、可能性としてあるものであろうと、社会秩序が全くの善だという信念に基づいている。しかし無政府主義を標榜する革命家たちも、この同じ信念を持っている。いかなる社会であろうと、悪の存在を容認するのは容易ではない。誰もその悪に何の責任もないからである。私にも、何世紀にも及ぶ愚劣な特定民族優越主義の犠牲者たちの怒りは、分かっている。しかし保守的ないかなる支配者層であっても、またそのような保守的な支配者層が全く存在しない場合でも、贅沢な人生を安易に手にすることはできないし、それによって我々に課せられた運命を甘受しなくてよくなるとか、同胞に対して慈悲の念を抱く必要がなくなるということもありえない。

科学技術の革新を加速させると、伝統の一端を危険なほど阻害してしまうことは、看過すべきで

はないだろう。この点でのマルクスの挑戦は、過去のどの思想家よりも評価できる試みだし、このことはマルサスの挑戦についても言える。確かに、科学技術は、マルサスが指摘したように、憂慮すべき事態を生む可能性を高めてきた。科学を装った人種差別<scientific hygien>によって、マルサスは、安易な回答に確信を抱いたが、他のものと比べればまだ許される。遺伝や環境、とりわけ民族の影響を科学的に研究することによって、特定民族優越主義が単に四分の一の真理でしかないことが、以前より遥かに明白になってきている。特定民族優越主義は、支持されればされるほど、無知と不誠実さが如実に現れる。

自由にはすべて危難が付きものである。人間には最大限の自由があるし、とりわけ大方の科学者はそうである。自由があればこそ、危険があり好機がある。車やテレビは受け容れながら、しかし繰り返される日常生活は青春時代のままに維持されることを望む人々は、それらを可能にさせる知性が存在していない場合には、裏切られることになる。我々が快適に暮らそうと思えば、目新しさが単なる機械類に限られてはいけないうし、そうさせてもならないだろう。単に機械類、電気類の創造だけでなく、社会に係る創造も行わねばならない。創造性は、究極の原理なのである。

しかしまだ、古来からの真理が一つ残されているように思う。活発な若者たちの中にはきっと気付いている者もいるはずだが、愛もまた同様に究極的な真理である。創造性と愛とは、確かに、一つの原理の二面性を表している。我々は、過去の様々な自己—それには自分自身の過去の自己も含まれているが—による創造を受けて創造行為を行うだけでなく、未来の種々の自己のためにも—また我々自身の自己も含まれているが、この自己を優先しなければならない必要性は全くない—創造行為を行う。すべての生は、社会的には依存しあっており、社会的な相互貢献をなしながら、同時にある程度の自己決定も行っているのである。各人は、「自分自身のことを」することはできるのだが、それは、ただ他の人々の生に参入することによってしかできない。それぞれは、現に活動しているという現在の喜びを享受するために行動している。この現在を過ぎれば、それぞれは、後に来るものたちの喜びに注意を払う。命ある限り、人は、少なくとも後にくる人々の中にあつた自分であるが、これは確約されているわけではないし、本人が差し迫った死に直面すれば、それは主要な事柄ではなくなる。現在が、過去を取り込み、(不十分ながらも)進んで未来に奉仕するのである。人間だけが、普遍的な事柄を考えることができる。人間の特権と尊厳は、自分が浜辺にある小石の一つでしかないと理解できる点にある。最終的には、全将来を視野に入れれば、浜辺全体の中身こそが重要なのである。個人的には、それが神—完全に不死で、最終的に重要な存在—なのだと言う方がよりはっきりするだろう。神だけが、すべての収穫を刈り取ることができる。我々人間には、植えつける喜びがあり、神には、刈り取る喜びがある。私にとって、人生の意味とは、まさに神の本質に気付くこと、つまり神がその愛を隈なく示されているという事実気付くことに他ならない。